
学校の七不思議

継

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学校の七不思議

【コード】

N99050

【作者名】

継

【あらすじ】

学校の七不思議。

私たちはそれを見に来た。

ただそれだけだったのに
：

今日は夏休み最後の日だ。

普通の人は今日で最後の夏休みを悔やんだり、終わっていない宿題のせいで慌てているのであるう。

でも、私たちは違う。

なぜなら、初日のうちにテキストは答えをまる写しにし、自由研究は参考書をそのままパクリ、日記は適当に書いた。

どうして、そんなことをしたかつて？

それは今日の夜に学校の七不思議を調べに行くから。
もちろん、親には内緒で。

私、大原めぐみはただ今仲良しの友達宮野羽衣・黒沢真人・二戸部優奈とともに夜の学校の前にいる。

「行くよ？」

羽衣が小さい声で言った。いつもはうるさいのでこんな小さい声をさせるととてもびっくりした。みんなが頷いたのを確認すると、私たちは校舎に入った。

「最初はどこ？」羽衣が真人に聞いた。

「えーと、音楽室だよ。」

「定番だね」羽衣が言った。

私も同感だ。私たちの七不思議は定番の場所にだいたいある。

音楽室、理化室、美術室、3階北のトイレ、体育館、プール、そして……

あれ？どこだっけ？？

最後の一つがわからない。

私はそのままみんなと共に6つ全てを回ったが何にもなかったし起

きなかった。

おかげで私たちのテンションは低い。

そんなとき、

「ねえ、気分直しに鬼ゴッコをしない??」

と羽衣が言った。

「いいね!!」 真人がやる気満々だ。

だが、

「えっ!?!早く帰らない??」と優菜は怯えながら言った

「何言ってるの??せつかく来たんだから、楽しまなくちゃ。」

と、強引にやらされることになった。

「参加者は校舎内にいる人。ルールは、鬼は全員捕まえるまで鬼!

!」

勝手にルールまで決められた。

じゃんけんの結果、鬼は羽衣になった。

それから数分。

私は二階の階段のところで優菜を見た。羽衣と一緒にだ。

でも、様子がおかしい。

すると、羽衣が優菜の肩を掴むと窓から突き落とした。

羽衣はすぐにその場をあとにした。

私は羽衣がいなくなったのを確認すると、窓から優菜に向かって、

「待ってて!!いま、真人を呼んでくるから!!」

そう叫ぶと私は階段を上った。

でも、真人はいなかった。

『真人、どこ?』

そう思ったとき、私はあることを思い出した。

『あれ?羽衣なんて子、友達にいたっけ??』

そう、私たちは仲良し3人組だったはず。

では、羽衣とは誰だ??

ふと、最後の七不思議が頭を過ぎった。

七不思議の七ツ目は、昔この学校で鬼ゴッコをしていた生徒が行方不明になって、

その亡霊がいまもおみんなを捕まえるため、さ迷っているというものだ。

『もしかして、羽衣はその亡霊なのではないか。だから、急に鬼ゴッコをしようと言い出したのではないか。』

私はそんな結論を出した。

でも、いまは優菜を助けることが先決だと思い、走り出した。

すると、壁に

『先に帰るね』

と真人の文字があつた。

私は大急ぎで昇降口に向かい、外に出た。ハズだった。

でも、私はまだ校舎の中にいた。

「どうして??」すると後ろから

「みーつけた。」

と羽衣の声がした。

羽衣の手は私の体を通り抜けた。

「えっ?」

羽衣は驚いている。

もちろん、私もだ。

私は自分の手を見た。

そっだ。私は

「亡霊!？」

羽衣は震えた声で言った。

そう、私は亡霊だ。

昔、私はいじめられた。
理由はわからない。

ただ、ムカついただけかもしれない。気に食わなかっただけかもしれない。

もしかしたら、ただの気まぐれだったのかもしれない。

でも、いじめは次第にエスカレートした。

始めはハブかれるだけだった。

でもだんだんものが無くなったり、水をかけられたり、ランドセルに落書きされたりした。

夏休み最終日にクラスのリーダー格の子に呼び出された。

内容は『肝試しをするから来い』だった。

私が行った。

学校にはクラスのほとんどがいた。

すると、クラスのリーダー格の子は私にこう言った。

「今から鬼ゴッコをする。鬼はお前。全員捕まえることが出来たら、いじめをやめてあげる。」いま考えるとバカなことだ。

だって、40以上いるクラス全員を私一人に捕まえることなど、出来るはずなかった。

でも、「いじめをやめる」と言う言葉に私は乗せられた。

「うん。わかった」

そう、言ってしまったのだ。

それから、すぐ私は屋上に閉じ込められた。

肝試しが新たに彼女たちの思い出した暇つぶしの遊びだということに気がついたのはそのときだった。

「出して!!!」

と私がどんなに叫んでも、彼女たちは笑っただけ。

決して、ドアを開けてはくれなかった。

そして、私は……

「そうだ。私はその後、屋上から足を滑らせて、死んだんだ。」
彼女たちも驚いただろう。

そして、私の遺体を焼却炉にいれた。

私は羽衣に向かってこう言った。

「全員捕まえないと私、いじめられるの。」

「い…嫌アアアアア…!!!」

羽衣は叫びながら、屋上へと上がって行った。

屋上へ上がった羽衣はドアに鍵をかけた。

ほんの出来心だった。

最後の七不思議のように鬼ゴツコをしよう、そんな発想がこんなことになってしまった。

ドンドンドン

と、ドアをこじ開けようとしているのだろうか、すさまじい音が聞こえる。

ふと、下を見ると、真人が校門のところにいる。

「真人!!!」

助かった! そう思い、

羽衣はフェンスに登りながら、真人に向かって助けると言いつつもりだった。

でも、手を滑らせて、落ちてしまった。

グシャ、と気味の悪い音がした。

屋上からめぐみがソレを見て言った。

「あゝあ。壊れちゃった…。」

そう言つと、めぐみは消えた。

それから数日。

優菜は学校の廊下を歩いていった。

ふと、外を見た。

あの夏の日のことが頭を離れない。

『私は羽衣と口論になり、2階から、落とされた。』

頭を打ち、混乱していたけど、私に声をかけてくれたあの子は何者なのだろう……』

屋上は今も閉鎖されている。

その向こうに彼女 大原めぐみがいた。

「だれか、私につかまって……いじめられたくないの……」
と泣きながら言った。

(後書き)

小学時代に書いた物語をアレンジしまよ。
季節外れだな。
では、またいつか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9905o/>

学校の七不思議

2010年11月18日21時16分発行